

物語

---

~ The strongest story in the different world ~

ペンダラス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界最強物語    The strongest story  
in the different world

### 【Nコード】

N7700M

### 【作者名】

ペンダラス

### 【あらすじ】

よくある、異世界転生物語です。

主人公は異世界に行った瞬間から最強仕様になりますのでご了承を…友人に「お前、ネーミングセンスなさすぎw」「とか言われてる自分ですのでgdgdかつ面白くないかもしれません(汗)

こんな作品ですが感想などよろしくです。

あ、ちなみにこの小説

自分のストレス発散かつ自己満足ですので。批判などのコメは一切無視しますので

でも、指摘とかだったらどしどし言ってください！

即、直しますので！

初作品ですので、至らないところばかりですがこの作品をよろしくお願ひします！

## 第1話 物語の始まり・主人公活動開始！（前書き）

今作品は、視点が 主人公視点 と 三人称視点 または その  
他キャラ視点 e t c  
と、ころころ変わりますので読みにくいかもかもしれませんが これか  
ら、直していくのでそこは目をつぶってください！すみません！

## 第1話 物語の始まり・主人公活動開始!

何処だここは・・・

気絶した自分が目を覚ますと辺り一面真っ白などこかにいた。見渡す限り真白である。人っ子ひとりいない

???「あ、起きたみたいだね」

?!声がした方向へ振り向く。

すると、さっきまでは誰もいなかったはずの場所に真っ白なワンピースを着た女の子(幼女)がいた

???「・・・?」

龍哉「ん、どうしたの?迷子かな?」

???「ち、違います!!これでも私は神なの!子供扱いすんな!」

・・・今、変な単語が聞こえた気が

龍哉「ごめん、もう一回自分が何なのか言ってもらえないかな?」

???「だーかーらー、私は神様なの!」

・・・あー、そうかこれは夢だな。世間一般的には夢オチに分類されることだ。きっとそうに違いない。

だって、ねえ?いきなり目の前に見知らぬかわいい女の子に話しか

けられるなんてなあ

神（自称）「むー、信じてないね？でも、君にも少しは自覚があるはずだよ？自分はもう死んでしまったって」

・・・

龍哉「あれ、やっぱり自分死んじゃってんの？」

神（自称）「そうだよ、なんだやっぱり自分でもわかってるんじゃない。君は少し前に交通事故で死んだんだよ」

そう、俺の記憶が正しければ新しい漫画を買って上機嫌なところにバイクが突っ込んできて・・・

龍哉「・・・ちょっと聞いていいかな？」

神（自称）「ん？なに？」

龍哉「確か自分の記憶が正しければ、自分に突っ込んだバイクがワープしたかのように自分の前に現れたんだけど間違いない？」

そうなのだ、別段前方不注意だったわけではない。ただ、100メートルほど離れていたはずのバイクが瞬きをした瞬間に目の前にいたのだ

神（自称）「ああ、それなんだけど。原因は自分なんだ」

龍哉「は？」

神（自称）「いや、ちょっと世界の管理でしてたらちょっとドジ

「つちゃって、空間にずれが生じちゃたの、それが原因」

龍哉「要するに、自分は君に殺されたと？」

神（自称）「そういうことになるかな、アハハハハ・・・」

龍哉「アハハハハ、じゃねえよ！どうしてくれんだよ！」

神の手違いで殺されるなんて理不尽すぎる！

神（自称）「お、落ち着いて！そのことについて話すために君をここに呼んだんだから！」

龍哉「そういうえば、ここはなんなのさ」

神（自称）「私を作った私の部屋みたいなものかな？ちなみに私が望んだものは何でも出てくるよ」

そういつて、急に向かい合って配置されたソファが地面から生えてきた

龍哉「・・・うそ〜ん」

神「これで、完全に信じてもらえたっしょ。それじゃ、座って座って。君のこれからについての話をするから」

とりあえず、床から生えてきたソファに座る。

神「とりあえず、君に二つの選択肢をあげる」

そういつて、神は自分のとなりにアニメとかであるモニターが2つ宙に出現した。

龍哉「まず、1つ目はこのまま天国に行く」

そう言うと、モニターの1つに”天国行き”の文字が浮き出てきた。

神「もう1つは、別の世界で過ごすか」

また、さっきと同じようにモニターに“異世界行き”の文字が浮き出る。

龍哉「その内、どちらかしかダメなんだよな？てか、異世界行くより元の世界に戻して欲しいんだが」

俺の中ではこれが一番なのだが…

神「うん。それ無理」

龍哉「あゝ、一応、理由を教えてくださいませんか？」

一瞬、イラッとしたが

どう仕様も無い理由なら許してやろう・・・

神「君が長い間、目覚めなかったことと、この世界の時間と君の世界の時間にズレがあるからね。今頃、君は骨になって地面の中は  
ずだよ」

・・・

龍哉「うん、まあそれなら仕方ないわな。」

生き返らせてもらっても即死亡とか洒落にならん・・・

龍哉「で、もう一度聞くがこれ以外に選択肢はないんだな？」

神「そうだよ、勿論異世界に行くなら、不自由はしないようにオプションもつけるよ」

龍哉「そうか・・・その異世界は魔法とかあるんだよな？」

神「あるよ。多分、君の想像通りのね」

「・・・どうしようか、このまま天国に行けるならそれでもいいけど。」

異世界にも興味はあるし・・・よし！！

龍哉「異世界に行くわ、興味あるし魔法使ってみたい」

神「わかった。能力の方は任せて！！後、容姿とかはどうする？そのままでもいいならそれでもいいけど・・・」

龍哉「どうせなら、格好良くしてくれ！」

神「りょうかーい！それじゃ、寝て。起きたらもう異世界だから、能力とか世界の説明は紙に書いて持たせるから安心して」

「・・・なんか、めっちゃイキイキしてるんだが、目も輝いてるし

龍哉「…なんか、楽しそうだな」

神「そ、そんなことないよ！ほら、準備するから」

まあ、いいか

そう思いながらこれから起きることにワクワクしながら目を閉じた

・・・寝れない、その後、1時間ぐらい寝付けずにいた自分  
だった

**第1話 物語の始まり・主人公活動開始！（後書き）**

どうぞしょうか・・・

感想、指摘など待っています！

## 第2話 (前書き)

書きダメてたものを一気に投稿します！

書きためた分は一気に投稿して、修繕すべき点はその次からしていきます！

## 第2話

ない、その後、1時間ぐらい寝付けずにいた自分だった？  
・・・

龍哉「ウーン、」

？どこだ？此処・・・

龍哉「そっぴや、異世界に来たんだっけ！」

状況を理解した上で周りを見渡す、

木 木 木 木

果てしなく広がる森、もはや樹海といってもいいほどのレベルだ

龍哉「どうしよう、陽の光すらまともに届いてないから真っ暗だし  
・・・」

こんなところに一人だけなんて

・・・怖くなんかないぞ！？決して怖いわけではない！

それにしても何か忘れているような・・・？

龍哉「あ！能力！説明書！」

あの、幼女が言うとおりならどこかに能力などが書いてある説明書  
がどっかにあるはず・・・っと、

お？ポケットに何か・・・

龍哉「発見！」

早速、読んでみる

「フムフム・・・」

要約するところだ

- 1、 その世界の文字を読み書きできる
  - 2、 魔法も使える 世界で一番魔力を持っており無尽蔵 すべて使える
- また、魔力を想像通りに扱うことができる

龍哉「まあ、こんだけ能力貰えたら簡単に死ぬこともないだろう・・・」

こんなに能力付けるなよ・・・

この世界、簡単に滅ぼせるぞ コレ

龍哉「そんなことはしないけど」と

そういつて立ち上がる、とりあえずこの森からでなければ

龍哉「よし、練習がてら試してみるか！」

え〜と、魔法を使うにはなにやらそれっぽいことをイメージすればいいらしい

セリフとかも自由みただし

龍哉「足のうらに集中つと・・・フツ！」

足の裏に魔力を集めるイメージし木に張りつく自分の姿を想像する  
そのまま、木の上に飛び乗る

龍哉「お、おお・・・できた」

そのまま、木の頂上まで登る

龍哉「お、あつちに街っばいがあるな。行ってみるか・・・」

俺は初めての力を確かめるように木の上を次々と飛び移りながら移動した

龍哉「そっついや、世界についての説明が書いてなかったな・・・」

「シエル side」

私は“シエル”この近くにある学園「メルニス」に通っている高校1年生、と入っても一週間前になったばかりです。でも、メルニス学園はネディシスでは一番大きく優秀な学園なのです。未だに自分がその生徒である事が実感できてないんですが・・・

で、私たちは今、モンスター討伐の任務で学園から最も近い森に来ています

私“たち”というのは

今回、この任務は学園によって用意されたものでありその目的は「同じ仲間としてお互いをよく知ること」ということで同じチームとなった

ギー・セール君

レオ・リグット君

エルダ・ヴェナンさん

サラ・コンスさん

そして、私 シエル・ヴェルデ

という、5人編成という他のチームより一人少ないチームでこの任務に向かっているのです。

ギー「あゝ、めんどくせー！」

レオ「確かにね」

エルダ「仕方ないでしょ？学校の授業の一環なんだから」

サラ「・・・しかたない」

シエル「まあ、二人の気持ちもわからないことはないですけどね」

今回のターゲットは”ゴブリン”

ハッキリいうと、コレぐらいなら私一人でもまとめて10匹ぐらい  
まとめて相手できるような相手なのでそんなクエストでここまで歩  
くのは私もめんどくさいです・・・

ギー「ま、さっさと倒して帰ろうぜ。こんな任務じゃお互いの力を  
見ることもなく終わり  
そっだしな・・・」

レオ「さゝんせゝい」

さて、暗くなる前には帰りたいですね

（20分後）

ギー「だー！クソツ！どこにいやがる！」

レオ「うゝん、いないねえ」

ゴブリンはこの森の中でもそんなに奥のほうには分布していない

このへんにいるはずなんだけど、一匹も見つけられないなんて  
ゴブリンは戦闘においては弱いが知能は高いほうなので集団で行動  
することが多い

なので、移動した跡などさえ見つければすぐなんですけどね…

サラ「・・・みつけた」

シエル「本当？サラちゃん」

サラちゃんが指さす方向には焚き火の跡がその周りにはゴブリン特  
有の石器が散乱している

そして、森の奥の方へと大量の足跡が出来ている

ギー「うしっ、さつさと足跡たどっていきますか」

そのまま、ギーくんを先頭に足跡をたどっていく

そのまま、ゴブリンにたどり着くと思っ居たとき

グルアアアアアアアアアア！！！！

エルザ「?!」

レオ「な、何?!」

サラ「・・・」

シエル「…この鳴き声は、ドラゴン!」

間違いない、昔一度聞いたことがある

この大気を揺るがす叫び、姿も見えないのに伝わってくる地響き…

レオ「ドラゴン？なんで、此処に・・・」

サラ「でも・・・私もドラゴンだと…思う」

ギー「ドラゴンか・・・おもしれえ!!」

シエル「ちょ、ギー君!」

レオ「ほっ」

走りだそうとしたギーくんをレオくんが後ろから捕まえる

ギー「おい、レオ!離せ!」

レオ「嫌だよ〜!どうせ、ドラゴンに挑みにいくんでしょ?!」

ギー「あつたりまえだ、せつかく強い奴と戦えるんだぜ?!」

シエル「ギーくん!ばかなこと言っていないで逃げるよ!」

そう言つて、ギーくんを連れて逃げようとしたら

サラ「・・・もう、遅い」

シエル「へ?」

サラちゃんの声を聞いて振り向くと

緑色の体、そして真つ赤な二つの眼が私たちを捉えていた  
手には襲われたのでろう、真つ赤なゴブリンがつかまれて…

・・・しばしの沈黙・・・

グルアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

サラ「逃げる！」

シエル「?!」

いつもは静かなサラちゃんが叫びそれを皮切りにギーくんを含めて皆が走りだした

それを追うドラゴンは木々を押し倒しながら襲ってきた・・・

第2話 (後書き)

続けていきます！

### 第3話（前書き）

投下！

誤字脱字の報告もよろしくです！

### 第3話

龍哉「疲れたア〜」

現在、休憩中だ

ここ前来るともう、陽の光も届いている。そこで疲れた俺は。内心、制限もなく疲れることのないであろう魔力を使わなかったことを後悔しながら

能力の書いてある紙の裏にいくつか書いてあったので使ってみたのである

今回、使ったのは「ウィンド・カーテン」

これは自分の周りに台風真っ青な風を巻き起こして身を守る技であるこれを今、登ってる木の周りにして休憩しているのである

龍哉「う〜ん、コレの欠点は外の様子がわからないところか…」

そう、強力な風で覆うために外が見えないのである

龍哉「能力使うか？でも、こっちは限りがあるんだよなあ。やめとくか」

そんなことを考えつつ休憩する。

その時、

バキッ

龍哉「…は？」

木が折れるような音がして自分の体が徐々に傾いていく

そして・・・

ズル

龍哉「え?!」

枝から落ちて行く、そのまま地面に落ちると思ったら ガンツ という音を発しながら頭から地面にぶつかった

〜三人称〜

シエル「早く!」

ギー「んなことわかってる!」

サラ「ハア、ハア」

レオ「まずいよ〜、どうする〜?」

エルザ「とにかく逃げるわよ!」

半パニックになりながら逃げ続ける。

日頃、多少は鍛えているためまだ大丈夫だが、サラはもともと体力がないため息が乱れ始める

シエル（そろそろ、サラちゃんが持たない!どうする?!）

サラの近くを走るシエルがいち早くサラの以上に気づき焦る

だが、学生4人でどうにかなるほど甘い相手ではない

サラにあわせて走ってもいいがドラゴンは木々をなぎ倒しながら追

つてきているためこれ以上、速度を下げると潰されてしまう  
何も打開策もなく逃げ続けるしシエル達  
すると・・・

ガンッ

??「いつてええええええ!!」

四人( )(?!?)( )

〔龍哉 side〕

龍哉「いつてええええええ!!」

マジで痛え！頭からぶつかった

なんだよ！

そして、顔をあげると・・・

龍哉「てめえらか！俺を落としやがったのは！」

目の前に同じ年ぐらいの女、男の4人組がいる。

てか、他にだれもいないのであいつら以外考えられない！

龍哉「コノヤ」「後ろ!!」「?!」

女の子の叫び声で振り返った瞬間、

ふっと、自分の周りが暗くなり見上げると緑の何かが迫っていた・・・

~~~~~

目の前には突如現れた青年がいた。

なにやらこっちに向かって叫んでいるがそれどころではない

シエル「後ろ!!!」

叫ぶのが遅かった

叫んだ瞬間、青年はドラゴンに踏み潰されてしまった

ギー「っ!!」

シエル「う・・・そ?」

目の前で人が殺されたことに今になって恐怖に支配された  
あまりの出来事に足がすくんで動かない

ギー「おい!シエル!!」

シエル「!?!」

気がつけば他の皆は先に逃げており

シエルの目の前には青年を踏みつぶした足をそのままに、もう片方の足を上げてシエルを踏み潰そうとしていた

シエル「~~~~~!! (もう…ダメ…)」

目を瞑り、死を覚悟した瞬間

ズウウウウウンという地響きと共に目の間に立っていたドラゴンは地面にひれ伏していた。

シエル「へ?」

呆気にとられるシエルだが  
すぐに立って、ギー立ちのところへ走りだす  
そして、振り返ると倒れて動かないドラゴンとその上で仁王立ちし  
ている光景だった

### 第3話（後書き）

一回、ここまです。

最初の方、特に長くてaaaaaになります！

第4話 戦闘終了(前書き)

グダグダだなあゝ…

今回は龍哉視点Onlyで

## 第4話 戦闘終了

ふう、あぶねえ

身体強化されてなかったら今頃ぺしゃんこだった・・・

それにしても、なんだこいつ？ ドラゴン？

まあ、そんなことはどうでもいい。

今の自分の中で一番にすべきことは仕返しだ。

ということ、潰されかけたので逆に潰してやるうということ、ドラゴンが片方の足を上げたところで勢い良く足を持ち上げ転じたところでドラゴンの腹の上に魔力で構成された不可視のおもりを作りおもいつきり抑えつけてやった

とりあえず、次の行動を考えつつもドラゴンの顔の前で仁王立ちしている状態だ。

なにやらさつきからこっちを見ている奴らがいるが放っておく。

それにしても、ドラゴンにめっちゃ睨まれてる…怖エ…

龍哉（うーん、殺してグロツテスクになるのは嫌だしなあ）

ということ、もう一つ魔力のおもりを作り自分が立っていたところに置き、圧迫する

いわゆる、窒息死をもらうのだ。

ひとまず、ドラゴンはコレで問題はないのもうひとつの問題を解決するか。

さつきから見てる4人組、この世界の住民なのだろう

髪の毛の色とか緑とかいるし、地毛なのか？てか、見てたんなら助けろよ…

苦しんでるドラゴンはそのまま放置でそいつらと近づくと

・・・今気づいたんだが、なんかありえないものを見るような目でこっちを見てる

俺、なんかしたか？

龍哉「なあ、ちょっといいか？」

4人「「「「・・・」」」」

・・・虫？じゃなくて 無視？

まさか無視されるとは...

龍哉「もしも〜し〜！」

シヨックだったが、とりあえず叫んでみる

シエル「?!あ、はい!」

どうやら、故意に無視していたわけではないらしい

龍哉「ねえ、君たち何で此处にいるの？」

シエル「え？ああ、クエストをしに来たんです」

ふ〜ん、どこぞの狩猟ゲームみたいなもんか

龍哉「そうか。で、アレは何？」

シエル「いや、何って言われても、見たとおりドラゴンですよ。」

どじやら、ドラゴンで合ってるらしい  
さて、後聞くことは…「おい」

龍哉「何？」

ギー「お前、何したんだ？」

…？ドラゴンのことか？

龍哉「どうやって、ドラゴンを倒したのか聞きたいのか？」

ギー「ああ、お前は武器を持ってないし魔法を使った素振りもなかった」

龍哉「何って聞かれても…、ただ、魔力で押さえつけてるだけだし」  
別に変なことはしていない、もらった能力つかって魔力を俺の想像通りのものにしただけだし。まあ、見た目はドラゴンが勝手に苦しんでるようにしか見えてないしな。

サラ「…死…んだ？」

なにやら小柄な子の呟きが聞こえたので振り返ると  
さっきまでもがいていたドラゴンが完全に沈黙していた。見た感じでは死んでいるんだろうけど用心して…

龍哉「落ちろ」

そうつぶやくとドラゴンが居た場所を中心に地面に穴が開きその中にドラゴンは落ちていった。それを確認した後、穴の中にドラゴン

がなぎ倒してきたのもであろう木々を突っ込んで蓋をする。  
一連の作業を終えてまた4人組の方を向くと  
なにやら、目を見開いて固まっていた

シエル「ちよつと、今の何ですか?!」

龍哉「え〜、いや何って聞かれても…」

目の前で起きた通りのことをしたただけなのですが…

瞬間移動みたいな感じでドラゴンの下の地面を移動させて穴をあけて  
風で木を運んだだけなんですけど…

レオ「それにしても、もつたいないことしたねえ〜」

サラ「もつたいない…ない」

龍哉「何が?」

もつたいないことをした?何が?

レオ「いや〜、確かにドラゴンの中では弱い部類のグリーンドラゴン  
だったけど、ドラゴンであるのは違いないからね〜、素材とか持  
つて変えれば高値で売れたんじゃない?」

・・・確かに勿体無いことしたな、まあ知らなかったのは仕方がない  
とりあえず、こいつらに頼むべきことがあるな・・・

龍哉「なあ、悪いんだけど、頼みごと聞いてくれないかな?」

サラ「な…に?」

龍哉「ここから一番近い街、いや村でもいいから案内してくれないかな？」

人がいるところまで行かないと話にならないしな

シエル「メルニスでしたら、私たちも帰るので案内できますが」

龍哉「ああ、そこでいいから頼める？」

シエル「あ、はい。いいですよ」

少し微笑みながら了承してくれた。

他の皆も反対ではないらしい

シエル「それじゃあ、案内しますねっと、その前に…」

龍哉「ん？」

シエル「名前、教えてもらえませんか？このままじゃ呼びづらいですし、私はシエルといいます。シエル・ヴェルデです。」

龍哉「ああ…」

どうしようか、別に偽名じゃなくてもいいか…

龍哉「よろしくなシエル。俺の名前は龍哉だ、黒神龍哉、いやリュウヤ・クロガミかな？」

そうして龍哉の初戦闘、世界との初接触は幕を閉じた…

## 第4話 戦闘終了(後書き)

次から龍哉の表記を「リュウヤ」にしていきます。

その場その場で思いつきで書いてる小説なので面白くなかったらすみません…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7700m/>

---

異世界最強物語 ~ The strongest story in the different world ~

2010年10月11日01時18分発行